



パトリック・ジェロラ「ジャポニダ」
2001年 プレスコ、キャンバス ©Patrick Gerola

パトリック・ジェロラ展

チケットは、7/13から開催の「ジョン・ミロ」展でもご使用いただけます

ブリュッセル生まれ、現在は日本を拠点にする作家パトリック・ジェロラは、作品の多くは自然をモチーフとし、つややかで、あざやかな色遣いでありながら、琳派など日本の古典の影響も感じさせる作風は、日本人にも親しみやすい。

メルシャン軽井沢美術館
(長野県北佐久郡御代田町馬瀬口1799-1/
☎0267-32-0288)
◆4/23～7/3 (火曜日休館)

〔右〕フェルナン・クノップフ
「プリマート、『妖精の女王』より」 1892年
〔左〕同「アクレイジア、『妖精の女王』より」 1892年

知られざるベルギー象徴派展

19世紀末のベルギーに生まれた「象徴派」の全貌を紹介する。悪魔やオカルトの儀式など、幻想的な世界を描き出した作品には、当時の急激な近代化の中で人間が疎外されていく風潮から逃れ、自然や神話的な世界との交流を目指した意図があらわされている。

尾道市立美術館
(広島県尾道市西土堂町17-19 千光寺公園内/
☎0848-23-2281)

◆6/17～7/17 (月曜日休館)

◆以後、鹿児島市立美術館、福井県立美術館、
長崎県美術館へ巡回



Q 日本ではベルギー関連の展覧会が頻繁に開催されています。引き続きすばらしいものを紹介していただきたいと思います。

大使 おっしゃるとおり、いくつかの展覧会が開催されています。中でもベルギーのアートを効果的に体験できるのは、愛知万博のベルギーパビリオンでしょうか。われわれのアートを象徴しているのではないかと思うのです。もしパビリオンを訪れていただければ、画面に広がる「ピクトリアルオペラ」と名付けられた展示をご覧いただけるとと思います。愛知万博のテーマ「自然の叡智」にのっとり、ベルギーアートの過去五世紀ほどを遡り、ベルギーの作家であるヤン・ファン・アイクやルネ・マグリット、ポール・デルヴォーといった作家の作品の中で、自然がどのように捉えられてきたのかを紹介いたします。これはベルギーのアートや文化というものを知る絶好の機会となると思います。おそらく数百万と推計される来場者の中の一部でもベルギーパビリオンを訪れていたければ、当然反応もあるでしょうから、そこから私にも新しい展覧会などのアイデアが浮かぶのではないかと考えています。